

# 医療の架け橋

日本・ミャンマー医療人育成支援協会

「研究内容も設備もはるかに進み、ミャンマーと格段に違う」。母国から約5000キロ離れた岡山(岡山市)で分子病理学を研究するミャンマー人医師、ミンミンウィンさん(37)は笑顔を見せる。ミャンマーの国立医学研究局に勤めるミンミンウィンさんは、NPO法人「日本・ミャンマー医療人育成支援協会」(岡山市)が5年半余りの活動の中で受け入れた、27人目の研修生だ。

ミャンマーで女性のがん死がトップの子宮頸がん検診法や、MRI(磁気共鳴画像化装置)、CT(コンピュータ断層撮影装置)など最新機器の操作や読影、細胞診の診断研修など、ミャンマー

1で必要とされているあらゆる分野から派遣されてきた研修生は、約2カ月の研修を受ける。帰国後は、その分野の第一人者として、同国で初めて完成した子宮頸がん検診センターで無料検診をするなど活躍している。

住居は、同会福山支部長の西山央子さんが私財のアパートを無償提供。研修費は岡山大や倉敷芸術科学大、岡山済生会病院、岡山協立病院などの協力で無料、生活費や旅費は同会が負担する。

元岡山大医学部長の岡田茂・同会理事長(71)は京都大に在籍していた88年、京大主導でヤングンに総合病院を建設する国際協力機構(JICA)のプロジェクトに参加。

## グローバル化で必須 母国の一線で活躍

◇下◇



研究の合間、同僚らと会話を弾ませるミンミンウィンさん＝岡山市北区の岡山大で

初めてミャンマーを訪れ、現地の医療の遅れに驚いた。「僕らが培った知識で協力すれば、さまざまなことが分かるのではないか」。岡山大に赴任後、文部省(当時)の科学研究費を受け、「遺伝性貧血」をテーマに96年からミャンマー(当時ビルマ)保健省医学研究局と共同研究を始めた。

02年には、岡山大と同局で協定を締結し、軍事政権の間も交流を継続。定年退官後の06年3月、同会を立ち上げた。

9月に始まったミンミンウインさんの研修は、今月末で終わる。「先進国の研究をレポートでミャンマーの大臣や研究所に伝え、設備向上や医療の底上げに貢献できるよう、少しでも多く吸収したい」と熱意を語る。

岡田理事長は「感染症の拡大などグローバル化が進み、各国が医療でも連携しなければならぬ。昨今、ミャンマーなど発展途上の医療レベルを引き上げることは不可欠。そのために、現地の医療人を日本に呼んで育てる人的交流を継続的に行うことが大切だ」と強調する。そして、「同じような活動をする多くの団体が、医療が進まない各国と信頼で結ばれた関わりを長期にわたって持てば、かなり大きな力になる」と期待する。

◇

同会は、活動に協力してくれる会員を募集している。会員には、研修生の活躍ぶりやミャンマーの様子を伝える機関紙(年4回発行)が届き、来日している研修生との交流会などがある。問い合わせは、同会岡山事務所(086・224・0102)か西山さん(090・8998・1508)へ。

# 研修医を受け入れ

【村本聡】